

を巻いたものもある。

人物埴輪では耳・首・手首・足首の腰のベルトに玉飾りなどを表現したものもあるが、実際に古墳から出土する玉は材質・形状によって多くの種類があり、硬玉（翡翠）や碧玉といった緑色の材質が特に好まれたようである。また、朝鮮半島との交流が活発化して後は金・銀・金銅・銅などの金属製品も一部で使用されるようになる（小林行雄『日本考古学概説』一九五二）。

### 三 生産の様相

#### 鉄の生産

前にみたように、古墳時代になって、古墳や各種遺跡から出土する鉄製品の量は弥生時代に比べて飛躍的に増加した。そして、五世紀代になると更に大量の武器・武具・農工具といった鉄製品が一つの古墳から出土するようになる。しかし、まだ国内では鉄の生産を行った痕跡は発見されていない。他方で、鉄素材といわれる鉄錠が主として五世紀代の遺跡から発見され、六世紀前半には減少すること、鉄生産に必要な高温状態を作り、維持するという技術的に共通する須恵器焼成技術が五世紀前半までに導入されたが、それが全国的に拡散するのは同後半ごろであること、そして五世紀前半〜中葉に古墳への

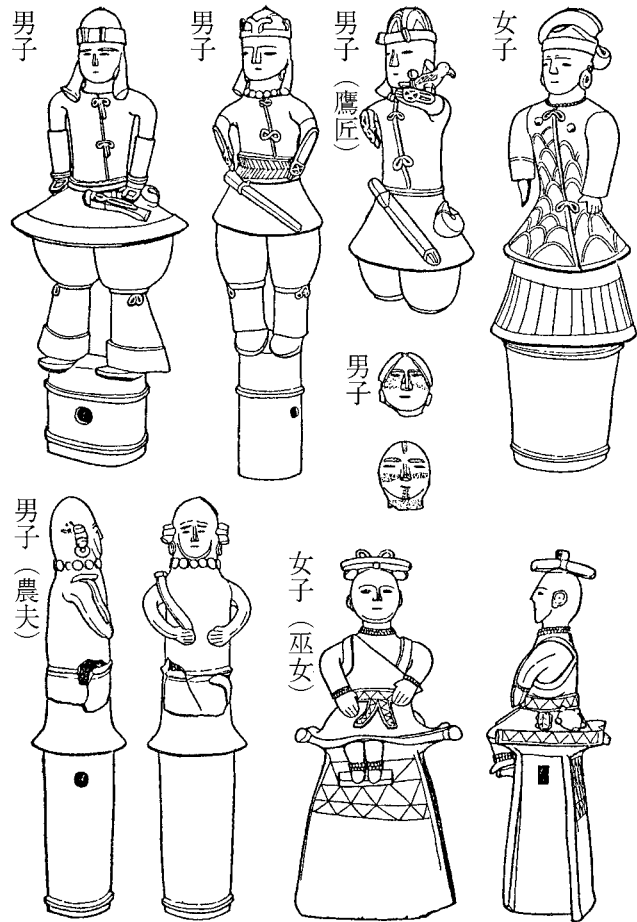


図2-100 人物埴輪に見る古墳時代の服飾  
(小林行雄前掲書より、一部改変)

鉄製鍛冶具の副葬が顕著となり、鉄需要の増加が推測されることなどから、我が国での鉄生産は五世紀後半〜六世紀前半ごろと考えられている（東潮「鉄の生産―五世紀の鉄素材の供給地を巡って―」『五世紀の北九州―倭の五王―時代の国際交流―』一九八九）。

六・七世紀代に使用された製鉄炉は長さ一メートル弱の長方形を呈していたようで、その中に木炭・砂鉄を入れて燃やし、<sup>ふい</sup>轆で送風して精錬作業を行った。西洋の製鉄法が導入された明治以



図2—101 鉄精錬作業の想像図

(松井和幸「日本における鉄生産はいつ始まったのか」『新視点日本の歴史』第2より)

前に広く行われたタタラ製鉄の起源である。岡山県などの中国地方で盛んとなるが、玄界灘沿岸地域でも行われた。

### 須恵器の登場

五世紀前半（四世紀後半説もある）に朝鮮半島から登窯のぼりがまを用いる土器焼成法が伝わり、

ここで焼かれた土器を須恵器と呼ぶ。それ以前に使用された弥生土器・土師器が低温（七〇〇〜八〇〇度）で焼かれ、軟質・多孔質で赤く焼き上がるものであった（酸化炎焼成）のに比べ、還元炎焼成により一二〇〇度ほどの高温で焼かれた硬質・緻密な青灰色の土器は、初期のころは威信財としても使用されたが、五世紀後半までには広く行きわたり、土師器とともに生活に欠かせないものとなった。土師器・須恵器ともに同じ用途が考えられるものが多いが、火にかける器（土師器）と液体貯蔵の器（須恵器）は焼物の性質からかなり厳密に区別されていた。食器は両者が使用されたが、須恵器が普及するにつれて主役となったようである。

我が国に導入された当初、豊津町居屋敷遺跡、筑紫野市隈・西小田遺跡、筑前町小隈・山隈窯跡群や大阪府千里窯跡群・陶邑窯跡群たもなどで个性的な器種・形態の土器が作られていたが多くの短期間で廃絶した。そして五世紀後半に陶邑窯跡群で作られた土器とほぼ同じ形態のものが、北部九州から東北南部にいたる広範な地域であらためて作られるようになる。ヤマト政権に一元的に掌握された須恵器生産が全国に波及するのである。



これ以後も須恵器の形態変化は全国的に同じ経過をたどることから、陶邑の影響力が非常に強かったことを窺わせる。

### 農 漁 業

弥生時代以来現在に至るまで、稲作は重要な位置を占め、さまざまな面で我々の生活を規定してきた。

稲作伝来以来、最も大きな技術的変革が想定されているのが朝鮮半島との活発な交流が行われた五世紀前半で、それはU字形鋤先と曲刃鎌の出現によって象徴される新しい技術の導入であった。鉄製農具は弥生時代に出現し、実際に装着された痕跡をもつ木製柄も出土するがその数は非常に少なく、もっぱら木製品が使用されたと考えられている。前期古墳からは多くの鉄製農具が出土するが、半面、集落跡からの出土例は少なく、やはり実用された例は少ないとみられている。

U字形鋤先は鋤・鍬両方の用途に使用でき、刃幅もそれ以前の農具に比べて広い。土地掘削に万能で、かつ効率的であつ

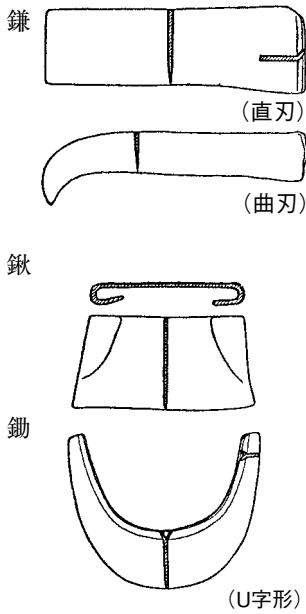


図2—103 鎌と鍬と鋤先  
(小林行雄前掲書より、一部改変)

た。この出現と急速な普及によって、固い台地の開墾も比較的容易となり、池溝開発といった土木工事が大きく前進するとともに、それまで機能分化していた多くの種類の農具が淘汰されるなど、影響は非常に大きかったと推測されている(上原真人「農具の画期としての五世紀」『王者の武装—五世紀の金工技術—』一九九七)。曲刃鎌は、現在でもほとんど形態が変わっていないことがその優秀性を示しているよう。

漁業を示す考古資料として、釣針やヤスといった鉄製品が古墳に副葬され、住居跡などから魚網のおもりとして使用したいろいろな形の土錘やイダコ用の蛸壺などが出土する。それらの形態も現在のものほとんど変わらない。

漁業に関連して、中部瀬戸内地域を中心に盛んに行われた塩作りについて付言しておこう。岡山県喜兵衛島は東西六〇〇呎、南北三〇〇呎の小島である。この南東浜遺跡では長径二〜三呎、短径一・五〜二呎の石敷きの炉跡が次々と造られ、炉の間には作業面があつて、その周辺に大量の製塩土器が廃棄されていた。この小島には六世紀中葉から七世紀代にいたる二十数基の古墳が造られており、いくつかには製塩土器が副葬されていた。この古墳の被葬者たちは明らかに製塩を主たる基盤としていたのである。同県牛窓町の海岸部に五基の前方後円墳が築かれているが、この周辺も地形的に農業生産力が低く、その基盤には水運とともに製塩も考えられている(近藤義郎『土器製

塩の研究』一九八四)。古代の吉備は鉄と塩の生産で権力を伸張したのである。

### 第三節 北部九州の古墳時代

#### 一 前方後円墳の出現

**石塚山古墳** 我が国で初めて前方後円墳が造られてからそれほと**赤塚古墳** どの時を経ずに、およそ三世紀の後半に現在の荊

田町役場の南の海岸部に大規模な人工物が造られた(図2-104)。

ほぼ全体を径数十メートルの石で覆った姿はまさに石の山であった。

この石塚山古墳は日本列島で最初に造られた前方後円墳の一群に属し、全長一一〇メートル、後円部直径約六〇メートル、前方部長五〇メートルの規模をもつとされるが、墳丘確認の発掘調査が部分的にしかなされておらず、前方部前面に墓地が造営されている関係もあつて正確な規模は確認されていない。古く江戸時代(二七九六年)に石室が開けられ、その際に銅鏡一四(一説に一一・一二)枚、素環頭太刀や銅鏃などが出土したと伝えられるが、現在では銅鏡七枚、鉄製素環頭太刀片・銅鏃一点などが近くの宇原神社に所蔵されて重要文化財に指定されている。

その後、昭和六十二年(一九八八)以降に数次にわたる発掘調査がなされ、その全体は未発表だが主体部の調査内容が公表

されている。それによれば、竪穴式石室は長さ一六メートル、幅一一メートルの巨大な墓壙(石室を埋めた穴)に納められていた。石室は大破していて、その痕跡から内法で幅一・四メートルと推測されたが、長さなどは不明のままである。江戸時代の記録では長さ三間(約五・四メートル)、床面の幅三尺(約〇・九メートル)、上端の幅二尺(約〇・六メートル)、深さ三尺余りと記録されていて参考になる。

この石室には通常と異なる特徴がある。一般の竪穴式石室では遺骸を納めた木棺を囲む部分だけが石材の木口面を揃えて空間を形成し、その外側は乱雑に石を投げ込んだような状態である(図2-77参照)のだが、ここでは墓壙壁に沿った、本来ならば全く見えないはずの部分で石室壁面と同様に面を揃えたように工作しているのである。その理由はまだわからない。町教委による調査では新たに舶載鏡(細線式獸帯鏡)片、琥珀製勾玉、碧玉製管玉、小札革綴冑、鉄鏃、太刀、鉄斧、鈍、蛸壺を含む土器片などが出土した(荊田町教委「石塚山古墳発掘調査概報」『荊田町文化財調査報告書』第九集、一九八八など)。

石塚山古墳と同じところに造られた古墳に宇佐市赤塚古墳がある。駅館川右岸の段丘上に位置し、全長六〇メートル弱の前方後円墳で周濠を伴う(図2-108)。これも古く大正十年(一九二二)に発掘されたために細部は不明であるが、大型の箱式石棺から舶載鏡五枚(盤龍鏡一枚、三角縁神獸鏡四枚)や玉類・鉄製品などが出土した。主体部こそ地域色ある石棺を使用するが、出土品